

鵜戸神宮：聖なる石（ご霊石）

この石板は、鵜戸神宮で現存する最も古い遺物の一つで、ここで行われていた儀式の性質が、神道ではなく主に仏教のものであった時代の面影を残しています。この石は 15 世紀のものと考えられ、当時、神社は正式には、仏様が神道の神様として現れた権現様を祀る真言宗の仏教寺院でした。このことは、現在は別物と考えられている 2 つの宗教が、日本において 1000 年以上にわたりいかに密接にリンクしてきたかを思い起こさせてくれます。現在の真言宗でも引き続き重要な、火を使った清めのための護摩の儀式は、この石の前で行われ、石には元々梵字（サンスクリット語の文字）が刻まれていました。刻まれた文字は意図的に取り除かれたようで、石の中央近くに丸い印だけが残っています。これが行われたのはおそらく、明治天皇（1852～1912）の新政府が神道と仏教の分離を命じ、神道の神社から仏教の形象を取り除くことが求められた 1868 年以降のことです。日本の一部地域では、これが仏教の建造物、彫像、芸術の広範な破壊につながります。宮崎を含むその他の地域では、反仏教の動きはそこまで熱烈なものではなく、信仰の最も明白な象徴を消すだけにとどまりました。